



本文にも書いたように、ここに到達するには地元ガイドさんの案内が不可欠である。書物などで調べようとしても無理だと諦めた方がよい。市場集落から川沿いに高岳山に向かう登山道をしばらく歩くのだが、その道からかなり離れてここに至るまで標識もないからである。高岳山は山口市では一番高い山で、山口県下第7位の標高1,040m。過去何回か登ろうとしたことのある山である。山頂からの十種ヶ峰、青野山

の眺めが素晴らしいという。閑話休題、苦労してこの供養塔に辿り着いたとしても、あくまで「伝」であり、これが本物の供養塔であるかどうかは分からない。そもそも大内義隆配下の有力武将の一人であった吉見氏の当主が山口で何者かに殺害されて、どうしてこのような辺鄙な場所に供養塔が建てられたのか。そんな素朴な疑問を持ってしまう。また今から約500年前のものにしては、供養塔に刻まれた文字が余りに鋭く形を残している。いやいや、静御前の墓の例もあるのだから、下世話の詮索は止めにして、何者かに殺害されたという吉見隆頼の無念さに心した方がよいだろう。

「石州街道シリーズ」も残すところ、あと5回となった。これが終われば来年5月に6回目のイラスト個展を山口菜香亭で開催していただけることになっている。毎回約40点を展示しているから、これまでざっと200点をご覧いただいたことになる。石州街道の完結後の次のテーマとして、少し気が早いですが、今考えているのは「大内文化散歩」である。市内の大内文化を改めて訪ね歩いてみるというはどうだろうか。(2024.10.23 記)

**イラストでたどる石州街道 31 伝・吉見隆頼供養塔**

この供養塔に辿り着くにはガイドさんをお願いしないと絶対に無理である。それだけに一見の価値はある。津和野三本松城主吉見隆頼は大内義隆の姉を妻にした吉見氏の第十代で、山口滞在中何者かに殺害された。彼の供養塔と伝わるものは市場集落から市場川沿いに1.5メートル余り谷に入った所にある。供養塔は高さ約90センチメートルで、江戸時代の地誌・防長風土注進案には「御戒名書附無御座候」と記してあるが、供養塔には「榮林源椿大居士」と鋭く彫られている。また裏側には「天文九年十月十九日吉見三郎」とも刻まれている。三郎は隆頼の通称だが、近くの恵長寺にある位牌には「天文八年九月二十七日没」とあるそうで、何ともよく分からない。

文イラスト  
古谷眞之助

